ボアジチ大学

交換留学報告書

静岡県立大学　国際関係学部

国際言語文化学科　４年　英米文化コース

光陰矢の如し。トルコでの 10 か月間はこの言葉がぴったりなほどあっという間に過ぎてしまった。まだ日本に帰国し 2 週間しか経っていないが、毎日のように美しいボスポラス海峡を見ながら大学に通学したり、チャイを飲みながら友達と話を弾ませたりなど、この 10 か月間で当たり前になっていたことが急に当たり前でなくなり、とても寂しい気持ちで一杯である。そんな中、ボアジチ大学での学業やトルコでの生活を振り返ってみると、様々な意味で非日常的で充実した日々を過ごせたと思う。勿論、そのような中で今までとは違った価値観や考え方にも触れることができ、留学前の自分とは一段と広い視野を持てるようにもなった。そこで、今回の留学報告書では私の視野を広げる契機ともなったトルコでの生活体験を報告させていただきたい。

先ずは、トルコ・ボアジチ大学での学業生活について報告したい。トルコ・ボアジチ大学では政治学・国際関係学を専攻し、基礎的な内容を扱うものから、より専門的な内容を扱うものまで様々な授業を受講した。基礎的な授業では、「外交史」や「国際関係論入門」などを、専門的な科目については、「朝鮮史」や「トルコ政治」などを、また聴講という形では「トルコにおける外交政策の問題点」の授業も受講した。私が履修した授業は全て講義形式だったが、規模は授業によって異なり、大講義で 200 人ほどの規模で行うものもあれば 10 人ほどの少数人数制で行うものまで様々であった。

留学する前から心の中でわくわくしていた英語での授業は、留学当初こそは授業のスピードやリーディングの多さに慣れていなかったため不安を覚えることもあったが、時間が経つにつれそれらにも段々と慣れていき、前期の中盤あたりからは余裕をもって授業を受けることができた。また、言うまでもなくボアジチ大学での授業は質も高く、何よりテストの内容が難しかったことを覚えている。一生懸命勉強したはずなのに、テストの点数が芳しくなかった時も何度もあったが、私なりに予習の段階から授業後の復習まで努力をし、次こそはもっといい結果を取れるようにと努力した。勿論、テストで良い結果を取ることだけを考えるのではなく、授業の中身を理解できていることが最も重要だと考え、授業中に聞き取れなかったところはレコードしたものを授業後に聞き直したり友達に聞くなどをして内容の理解に励んだ。

ボアジチ大学でボアジチ学生と同じ授業を受け、出会った友達を観察していく中で今でも印象に残っていることは、学生の学習意欲と意識の高さである。授業中での学生の積極性は非常に高く、また授業後には生徒たちだけで授業の内容について議論をしている姿を何度も見た。また、学内で会う友達の多くが空き時間をただ友達と過ごすだけではなく、図書館に通い有効活用していたことも覚えている。更にダブルメジャーをしている学生が見られるように、自分の専門プラスαの事を学ぼうとする学生も多く、その他にもインターンシップへ積極的に参加する学

生や、新しい言語を習得するために平日だけではなく土日の時間を使っている学生にもたくさん出会った。

　ボアジチ学生の学習意欲や向上心が高いのは、トルコの中でもトップクラスの大学だから皆の意識が高いであるとか、勉強をすることに苦を感じない人が多いとか、様々な理由が挙げられるとは思うが、私は友達と話している中で未来に対する不安感も彼らをあそこまで能動的に動かす理由の一つであると感じた。友達の一人はボアジチ大学を卒業したとしてもトルコのこれからに期待が持てず、海外での就職を希望しロシア語を必死に勉強していたし、彼と同じような考えを持っている学生にもたくさん出会った。トルコは G20 のメンバーでもあり、今後の経済成長が見込まれる VISTA の一国でもあるが、近年の経済状況は安定しておらず、また政治的にも不安定な状況が続いている。よって、多くの学生が卒業後の安定した生活を求め、大学生の間に自分の能力を高めようと必死になって努力しているのだと思う。

　そして、こういった学生と出会う中で、私は「勉強」に対し改めて考えさせられた。ボアジチ大学で出会ったある友達は、将来の安定性の観点から他大学の医学部への進学を両親から強く勧められたが、最終的にはボアジチ大学に進学することを決め、現在政治学を学んでいる。そして、将来は親を見返すためにも外務省への就職を目指し、毎日勉学に一生懸命励んでいる。彼のような将来に向けて必死に勉

強しているボアジチ大学の学生達を隣で見ていく中で、正直今までの私は彼らと比べると生ぬるい気持ちで大学に通い、授業を受けていたのだと感じた。自分自身ではそれなりに大学入学後から、将来の事を考えそれなりに勉学に励んできたとは考えていたが、単純に甘かった。私が出会ったボアジチ学生はもっと将来の事を考え、もっと真剣に今と向き合い努力していた。もちろん、将来に不安を感じ勉学に励む学生は日本にもいる。しかし、ボアジチ学生からは必死さがもっと伝わってきた。それ以降、私は「勉強」に対して今以上に真剣に取り組もうと思ったし、何よりトルコ・ボアジチ大学での学業をより頑張ろうと考えるようになった。

次に、トルコでの生活とそれを通して感じたことについて報告させていただきたい。トルコでの生活は日本のそれとは違って時間がゆっくりと流れている感じがして、居心地がよかった。ボアジチ大学周辺では朝から夜遅くまで老若男女を問わずみんながチャイを片手に世間話をしていたし、働いている人たちもマイペースにのんびりと働いており、非常に穏やかで平和な時間が流れていた。日本でのせわしない生活に慣れていた私は、最初こそはそのトルコのゆっくりとした雰囲気にイラっとすることもあったが、途中からはそれにも慣れて、並大抵な事が起きない限りは動揺しなくなっていたように思う。

そんな私が住んでいたイスタンブールは、トルコの中でも最も発展した都市であったため生活に困ることはほぼなかった。欲しいものは簡単に入手でき、行きた

いところにはバスやトラム、メトロなど様々な手段で簡単に行くことができた。また、トルコは学生に非常に優しい国であり、学生であれば様々な歴史的建築物や観光スポットにも無料または半額で入場でき、交通機関も普通の半額程度の金額で使用することができた。言語に関していえば、イスタンブール内でも英語は通じないことが多く、人々とコミュニケーションをとるためにトルコ語の学習が自然と必要になった。

　ボアジチ大学での授業が無い週末などには、大学で出会った友達と時間を共にすることが多かったと思う。大学周辺のご飯屋でカフヴァルトと呼ばれるトルコ風朝ごはんを食べて世間話をすることもあれば、イスタンブール内を観光することもあった。また、友達の実家に招待されて行くことも後期に入ってからは多かったように感じる。トルコ国内はたくさん観光したが、各地域で宗教色が異なりそれを観察することも楽しかったこと記憶している。

　そして、そんなトルコでの生活を報告する上で切り離すことができないことと言えば、宗教である。人口の大多数がイスラム教徒であるトルコでは、日々の生活を過ごしているだけでもイスラム教を感じることができた。ヒジャブを被った女性はもちろんのこと、モスクなども至る所で目にすることができるし、コーランの

一節をうたったアザーンは誰もが眠っている早朝から毎日流されていた。ここまで宗教を肌身で感じることができるトルコの生活は、宗教とは縁のない生活を今まで過ごしてきた私にとって、「ザ・異世界」といった感じであった。

そんな宗教を身近に感じることができるトルコでの生活で、宗教が関係して困ったことといえば、長距離バスで女性の隣の席に座れないこと、ポークを食べることができないことくらいしか頭に浮かばず、その他は何も問題なく過ごせたと思う。また、トルコへ来る前には、「宗教を持たないことがトルコ人との円滑な関係を気づく上での足かせになるのではないか」などといった不安も抱いていたが、考えるだけ無駄であった。勿論ムスリムの中にも悪い人はいるが、多くが宗教に関係なく誰にでも親切で、情が深い人々であった。モスクに行った際に全く面識がないにも関わらず中の案内を丁寧にしてくれる人もいれば、ラマダンの時期に一日の断食後に行う夕食会（イフタール）に誘ってくれる人々にも出会うことができた。

10 か月のトルコでの留学生活でイスラム教に触れる機会はたくさんあり、ムスリムの人々の親切な対応を受ける中で、「私たちが信じているものを知ってほしい」という彼らの気持ちを感じることがあった。そして、それを感じるたびに宗教に向き合ってみようと思い、試みたことを今でも覚えている。しかし、向き合って考えれば考えるほど彼らの信じるものが理解できず、「なぜ目に見えないものを信じることができるのか」と思わざるを得なかった。また、宗教は時に人々の自由を制限

してしまう。特にイスラムの世界では女性が車を運転してはいけなかったり、サッカースタジアムに試合を観に行くことさえも禁止されていたりと女性の権利が確保されていないことも多い。（イランでは今回のワールドカップで女性のパブリックビューイングでの観戦が認められたが。）私にとっては自由を制限してしまうコーランの教えを守ろうとすることの理解にも苦しんだ。

　そして、更に私を困惑させたのは、人によって信仰の度合いに大きな差がある事である。毎日礼拝には行くがお酒を飲んでいるという人もいれば、ラマダンの時期に「今年は断食しないけど、去年は断食をしたよ」とか「断食はしているけど、今日はお酒を飲むよ。」と話している人も多くいた。また、そういった教えを守っていない人々でも当たり前のように自分のことをムスリムと名乗ることにも驚いた。特にボアジチ大学には敬虔なムスリムが多くいる一方で、こういったタイプの学生も多く、私はここまで信仰心・敬虔の度合いがバラバラで、イスラムの教えの解釈が異なってしまうイスラム教の存在意義にも少しだけ疑問を抱いてしまった。

　宗教に触れれば触れるほど、疑問は増えるばかりではあったが、１０か月間のトルコ・ボアジチ大学での留学生活を通して宗教、特にイスラム教に対する理解は以前より深まったと思う。イスラム教の教義の内容はもちろんのことだが、それを信仰している人々の環境ついての理解も深まった。やはり、イスラム教はトルコ全体の社会に深く結びついており、それを信仰している人々も家族の影響などで小さ

い時から当たり前のようにイスラム教に触れている。よって、なんの疑いも持たずに信仰することが当たり前だと考えている人も少なくない。実際、モスクに行った際に小さい子供が両親と一緒に来ている姿を見ることは普通であるし、ラマダンの時期にはモスクの近くで夜遅くになっても子供が集まって遊んでいる姿もよく目にした。コミュニティ、家族を通して日々の生活にイスラム教が密接に関わってくることで、それがない生活を考える機会を得ることは難しいのではないかと感じた。また、これを裏付ける事実として、ボアジチ大学のような世俗的な大学に進学し、色々な人々に出会うことで、今までイスラム教の教えに何の疑いも抱かなかった人がまるで別人のようにお酒を飲み始めたり、礼拝をしなくなることも珍しくない。このような発見はその地で実際に生活してみることで得られることだと思うので、トルコで実際に沢山の人々と触れ合いながら観察することができて良かったと思う。

最後になるが、このような貴重な体験をする機会を与えてくださった静岡県立大学、そして私を受け入れてくださったボアジチ大学の関係者のすべての方々に、心からの感謝を申し上げたい。奨学金などの金銭的な援助から、留学が始まる前と始まった後にわたってして頂いた手厚いサポートがあったからこそ、私のボアジチ大学での留学が内容の濃い充実したものとなった。また、私費留学では今まで述べたような経験ができ

なかったことも確信している。今後は、異文化の地・トルコで受けた刺激、そして経験

して感じたことを忘れずに今後の大学生活、そして卒業後のキャリアを過ごして

いきたいと考えている。

留学報告書

ボアジチ大学（トルコ・イスタンブール）

静岡県立大学３年国際関係学部国際関係学科

私のトルコでの留学生活は毎日毎日新しいことに直面することができる刺激的で色濃いものでした。また私にとって、この留学体験はトルコにいた期間のではなく、その交換留学に応募するために TOEFL の勉強をひたすらしていた半年間も大切な思い出です。だから今回のこの留学体験レポートでも、まず最初に留学へ行く前の日本での準備期間について触れたいと思います。その後、トルコでの大学での体験を学内の授業などの体験、そして友人たち交際などの学外での体験の二つについて話したいと思います。ですので本レポートでは、①留学への準備、②学内での体験、③学外での体験、の三つに分けて報告をしようと思います。

まず、私がこのトルコ留学を本気で行きたいと考え、英語の勉強をし始めたのは一年次の６月ごろのことです。今でもよく覚えているのは、当時静岡県立大学に入学してまだ２か月弱しか経過しておらず、周りの友人たちも友達作りや人生初めてのアルバイトに一生懸命という空気が自分の周りに強くあったことです。そんな中、できるだけ早く留学へ行きたいと考えつき、佐藤先生の研究室に相談に行ったのは７月でした。

自分の当時の英語力では圧倒的に留学の応募基準に達しておらず、英語の上達と TOEFL のハイスコア獲得必須であったため、せっかく３か月前に大学受験が終わったにもかかわらず、毎日図書館に終了時間の１０時まで図書館で一人英語の参考書に向き合う生活をしていました。

大学受験と大きく違ったのは自分と同じ境遇の友人などが一人もいなかったことです。図書館で一人勉強しているとき、自分のやっていることは本当に自分のためになるのか、もしも TOEFL 本番でいい結果が出せなかったら半年の英語の勉強は完全に無駄になるのではないか、そんなような思いを持ち続けながら参考書と向き合ってました。何度かの TOEFL 試験ののち、最後の結果も期待するほどの高得点は取れず、それでも何とか人数制限に滑り込む形で留学希望が叶ったときは本当にうれしかったです。

後でも少し触れますが、このほぼ一人で半年間英語の勉強を続けられたこと、そして曲がりなりにも結果をもらえたという経験はとても貴重な経験になったと思います。

そのような経緯を終え、何とか２０１７年の９月からトルコのイスタンブールにある、ボアヂチ大学（Boazici University）に約１０か月間の留学に行くことができました。留学に行く前からある程度覚悟していたことですが、やはり現地での大きな問題は言語、自分の英語能力の低さでした。もともと英語能力上達を一番の目標として留学した私でしたが、現地についた当時はほとんど絶望的といってもいいほどに英語の会話、特にスピーキングができず、とても苦しい思いを最初の３か月間しました。

またここからは具体的な学内での経験、授業などに関することですが、やはり最初の数カ月は授業に苦しい思いしかなかったように思います。もちろん授業の形態はディスカッション形式や大きな講義室でも生徒が活発に挙手をする教室の空気など日本の大学との授業との違いはとても魅力でした。しかし、そんな刺激的な授業でも自分のリスニング能力がついていかず、教授が話していることの半分もわからない、教授や学友に話を振られて

もスピーキング能力がついていかず I have No Idea としか答えられない、などとても悔しい思いを多くしました。

また大きく大変、という意味でショックを受けたのはやはり、課題、もしくは予習の多さです。私が前期に取っていた授業の一つに「Diplomatic History sec2」というものがありました。この授業はフランス革命後から冷戦期終了までの世界史（とくにヨーロッパ史）を詳しく見ていく、という授業内容だったのですが、先生が用意するテキストを毎週８０ページから１００ページほど読んで火曜日の授業に参加しなければならず、毎週日曜、月曜は死ぬ思いで寮のスタディールームに籠っていました。

しかし今思い返せばその予習に明け暮れた前期の経験も、自分でもどうにか工夫と努力を絞ればそれまでの自分では予想もつかないような量の課題、仕事もこなせるのだ、という自信に繋がりました。

また一つ、ボアヂチ大学の授業を経験したことで得られた大きなものは自分が英文学にかなりの興味を持っているということを知れたことです。これは自分が今静岡県立大学で専攻している学部とは大きく異なるので自分の大学卒業に直接つながるわけではないのですが、それでも今まで自分が知らなかった自分の新しい好きなことを知ることができたのは大きな喜びだといえます。

この喜びを得られた理由はボアジチ大学の自由な授業選択システムです。ボアヂチ大学に留学する留学生は自分が一学期の間に受ける授業は自分の選択した学部の科目を２つ以上選択すれば、ほかの授業はたとえ他学部の授業でも簡単に履修手続きをすることができます。私はこのシステムを活かし、いくつか他学部の授業を履修していたのですがその中の一つに英語を上達させたい学生のための Advanced English という英語の授業を前後期とも履修していました。

この Advanced English の授業の中で私はいろいろな時代、形態、作者の英文学を読み学生やアメリカ人の先生と話しました。時にはエドガー・アラン・ポーの詩を、時にはギリシャ神話を、時にはシャーロックホームズの小説を授業を通して深く読むことで日本語での表現とは違う方法でのある意味回りくどい英語の言い回しが自分にはとても「面白い」と感じるということを発見することができました。

このように、ボアジチ大学のフリーな授業選択形態によって私はまた一つ自分の人生を楽しくさせてくれるものを見つけることができました。

ボアヂチ大学での授業についての経験を総括をすれば、苦しい思いや悔しい思いをたくさんしましたが、それ以上に得られたものは大きかった、と言えます。この学内での経験の総括に最後に付け加えたいのは、結局最後まで教授の５０分間で言っていることが１００％聞き取り、内容を完璧に把握することはできなかった、ということです。最後の最後の授業まで、最初期と比べれば小さくなったものの、授業を完璧に把握できないことへの悔しさというものは消えませんでした。この話はこの報告レポートの総括でもう一度触れたいと思います。

さて、イスタンブールでの学外での活動についてですが、正直に言えば私はイスタンブールで何かプロジェクトに参加したわけでもボランティア活動に参加したわけでもありません。またコレ、といった部活への正式の参加があったわけでもありません。今振り返れば本当にヨーロッパ諸国などから来たエラスムスの留学生の友達や、現地のトルコ人の友達と毎日遊んでいただけのように思えます。ただそのただ友人たちと過ごしたトルコでの日々が私の中では大きな留学の思い出の一つとなっているのでこの報告書にも主に日々の友人たちとの交際のことについて書きたいと思います。

まず、ボアヂチ大学のニットクラブ（通称ニット会）について話したいと思います。ニット会のトルコ人たちはかなり日本語のレベルが高く、日常会話なら何の心配もないというほどで私もトルコに到着後数日は彼らに身の回りの準備のサポートをしてもらっていました。しかし段々とトルコでの生活に慣れていった私はほかのヨーロッパやアジアの国から来た留学生たちとの交流にも参加するようになっていきました。そしてここがおそらく私が一番留学で悔しい思いをした場面です。

前述もしましたが、私はトルコに来てから数カ月の英語のレベルは会話できる程度には程遠く、そしてそれはもちろんほかの留学生たちと一緒にいる時ももちろん例外ではありませんでした。楽しく会話をしたくても向こうが何を言っているか聴き取れなかったり、聞き取れてもこちらが言いたいことをすぐ英語で話せず、空気が固まったまま違う話題になったりと、たくさんの歯がゆい思いをしました。また特に悔しいと感じたのは段々とそのような状況になるのが怖くなってきて、せっかく留学生の友達が遊びに誘ってくれてるにも関わらず、あえて「用事がある」などと嘘をついて誘いに乗らなかった時です。今でも時折思い返しては、あの時友達の誘いをすべてちゃんと乗っていたら、と後悔することがある程です。

それでも段々とその友人たちとの会話のレベルにも慣れてこれたのはほとんど前期が終わるころだったと思います。もちろん僕が前期の後半になってやっとまともになった理由は、うまく会話もできない僕を前期の間誘い続けてくれたほかの留学生、またはトルコ人の友人のおかげです。今思い返せば、もっと早く上達したかったという思いも強いですが、それでも本当に多くの人に支えられ、受け入れられ、どうにかこうにか留学の前期を終えられたのだなあと思います。

交友関係で悔しい思いをした話はこれくらいにしてこのパートの後半はトルコで友達と付き合う中で面白いと思ったこと、興味深かったことなどについて話したいと思います。

トルコでの友人づきあいの中でやはり一番面白いと感じたことはトルコのチャイの文化です。友人から聞いた話では、トルコでは多くの人が熱々のチャイ（トルコのお茶）を一日中かつ一年中飲んでいるそうです。しかもチャイを飲みながら友人たちとの歓談を交えるのがトルコ流だそうで、最初は口にもつけられないような熱々のチャイが毎回飲まれるのは、チャイが熱ければ熱いほど覚めるのに時間がかかり、その分だけ長く友人や家族と会話ができるからだそうです。たしかに多くのトルコ人（少なくとも僕の友人たち）はみ

んなおしゃべりが大好きで、授業と授業の空きコマ、休日のちょっとした時間など、時間があればチャイに誘ってくれました。このように本当に国民柄と文化が強くマッチしているのはとてもおもしろいと感じられるトルコの一面でした。

トルコ人以外の留学生たちとの交友では、これはまじめに話しますが、本当に酒はコミュニケーションにおいて大事なものなのだな、と感じたことがこの留学で得られた面白い経験だなと思います。というのも、留学生の人たちと遊ぼうとなったとき大抵はクラブかバーに連れていかれ、飲み、話し、踊り、と日本での友人づきあいとは少し違う友達との遊び方に最初は少し戸惑い、段々とそれが楽しく思えていきました。授業では絶対に理解のできないリアルな「海外」を一番彼らとの遊びの中で見つけられたのだと感じます。

あと一つ交友関係の話で出しておきたいのはルームメイトの話についてです。僕ら日本人留学生はトルコに到着してから最初の数週間は同じ部屋でのルームシェアをしていましたが、途中からきちんとほかの寮生たちと同じように部屋をそれぞれ振り分けられ、僕にもアイベルクという名のルームメイトができました。おそらく僕が英語がうまく話せなくても何とかへこたれずに一年やっていけたのは彼のおかげです。彼も僕と同じか少し上手程度であまり英語が話せなかったのですが、それでも優しく、トルコ人らしくおしゃべりで趣味もあったのでよく二人でお互い辞書を片手にくだらないおしゃべりや少しまじめな話しを何時間も話しました。おそらく僕がこの留学の中で一番話していて気が楽だったのは彼だと思います。ルームメイトがだれになるか、気の合うやつか、なんてことは完全に運ですが、私はルームメイトがアイベルクであったことに本当にラッキーだったと確信して強く言えます。

段々と留学生やトルコ人の友人たちと仲良くなっていき、アイベルク（ルームメイト）とも将来の話なんかをするようになって段々と感じていったことは外見や声、言語を大きく違うけれどそれでも一人の人、将来について悩んだりする一学生としては日本人と大きく違うわけではないのだな、ということです。留学する前までは海外とは本当に自分が住むこの日本とはまったくもって異なっていて、きっとそこに住む人々も全然自分や自分の周りの日本人とは違っているのだろうな、という気持ちを抱いていました。現にそれは少し正しいことだとも思います。やはり無効に１０か月滞在する中でありありと日本人とのいわゆる国民性の違いのようなものを見せつけられることも多かったです。それでも友達づきあいを経て、留学後半で思っていた考えは「やはりそこまで大きく違わない」という気持ちでした。言い換えれば今までずっと遠くに思えていた「海外」がかなり身近なもの、そこまでは言わなくても思ったほど遠いわけではないもの、に変化していったようでした。そしてこの「海外」に対するイメージの変化が私が学外で経験できた一番大きなものであるように思えます。

ここからはこの報告書の総括に入っていきたいと思います。いろいろとトルコでの楽しかったことや悔しかったことについて話しましたが、今この１０か月の海外留学を経た上で強く思うことは「どんな形であれ海外に関係のある将来にしたい」ということです。あ

りきたりであるとは自分でも感じますがそれでも、これが私が海外留学を経て手に入れられた気持ちです。正直に言えば、まだ自分の英語力にはまったくもって納得がいっていません。友人との会話のレベルももっと深い話や、もっとくだらない話ができるようになりたいし、授業でもリスニングや、スピーキングももっと上達したい気持ちです。この悔しい思いがあるからこそ、将来必ずどこかでリベンジをしたいと考えるし、そのためにまだまだ英語学習も区切りをつける気はありません。また友達付き合いの中で感じられた「『海外』の近さ」も将来海外に携わりたいという気持ちの大きな理由です。

留学でこのような大きな功績を持ち帰ってきた、というわけではありませんがこの海外留学は私の将来への気持ちに大きな影響を及ぼす、とても貴重で大切なものであったと私は強く思います。

ボアジチ大学
交換留学報告書

静岡県立大学　国際関係学部　国際言語文化学科

３年　英米コース

った。たとえ親でも子に信仰をすすめることはないらしく、確かに親がムスリムでも私は違う、というケースもあった。もちろんこれはトルコの話であり、国や地域によっては厳格な場合もあると思う。だが、少なくともトルコのイスラム信仰について、大きく印象が変わった瞬間だった。特に家族であれば、誰もが同じく熱心に信仰するという勝手なイメージがあったが、自分の意志で神とつながっているという点でどこか親近感をおぼえた。

イスラム教に関して、断食期間中にも大きな発見があった。断食中のある日、脇を走行中のバイクが私の乗っていたバスと何かもめたらしい。怒ったバイクの運転手がバスに乗り込み、運転手と殴り合いが始まった。屈強な男性陣が止めに入ってもおさまる気配はなく、運転席から離れた場所にいた私でさえも恐怖を覚え一人でおびえていた。すると、ヒジャブを被った女性が堂々と間に入りバイクの運転手を言葉で諭し、その喧嘩を見事に止めた。実は、断食期間中に悪口や争いごとをすることは最も卑しく恥ずかしいこととされており、この期間にはすすんで他者に良い行いをする習慣がある。こうした教えがあることは知っていたが、実際にそれを目の前にして初めて、コーランや教えの上だけでなくどのように実行されているのか実感をもって知ることができた。

帰国して初めて気づいた自分の変化も多くある。一番大きいのは性格の変化である。もともと私は平和主義で、怒るエネルギーがもったいないと自分で自分を諭して負を消化してしまうような性格だった。それが、今では不満や正しくないことに対して疑問をもち、きちんと反論できるようになった。これは間違いなく、トルコで何度も味わった理不尽な経験がそうさせてくれたのである。電車やバスで日本語を話すとにやつきながら真似をされたり、主張のはっきりしているお国柄ゆえなのか、仲良しのルームメイトにさえ「寿司や生魚を食べるのは気持ち悪い」と嫌な顔をされたこともある。そんなことをされてもいつも通りあしらっていた私が、人生で一番激怒したのはまさかのトルコ移民局だった。誰もが肩の力を抜き、必要最低限のことがなされていれば大丈夫というトルコの生活スタイルは、せわしなく働く日本からきた私には理解しがたい異文化であった。移民局のような国の重要機関でもそうした働き方が当たり前であり、現地の人は誰も文句を言わない。それが当たり前だからだ。だが、移民局の勝手な判断で私の在留許可書が失効したこと、彼らの仕事が遅く（彼らに言わせれば“焦ることはないから”）事態が直前になって発覚し

準備期間を含めると約２年、先週の帰国をもって私の留学計画は完了した。最後に名残惜しくトルコの景色を眺めたのは、１年前に初めてトルコの空気を吸ったのと同じアタチュルク空港だった。中学生の頃から夢見ていた留学生活が終わってしまった。憧れの海外留学の舞台が、まさかトルコになるなど私自身もまったく予想外である。だが、トルコに対するホーム意識は強く、トルコにまた帰りたい、トルコを選んでよかったというのが一番強い感情である。

渡航前、私のトルコに関する知識はゼロに近かった。恥ずかしながら地理関係もあやふやで、ましてやトルコ語など挨拶ひとつ知らなかった。更に、行き先を友人や親せきに報告すると、誰もが近年のテロを思い浮かべ治安を心配した。ところが、幸か不幸か私自身はトルコ留学に対して何も心配していなかった。それは、長年の計画がついに実現する嬉しさと、実際には実感がないゆえにふわふわした夢のような気持ちで過ごしていたからかもしれない。実際に渡航し、トルコで過ごす毎日は何気ない日常すべてに驚きや戸惑い、刺激、発見、時には恐怖も詰まっていた。毎日が未知との遭遇で、一瞬で終わってしまうのである。帰国したいま、誰もが「おかえり」の次に必ず「無事でよかった」と身を案じてくれる。こうしたみんなの温かいことばやほっとした顔を見てやっと、私はなにかすごい場所で、すごい留学経験をしてしまったのかもしれないと思うようになった。

トルコでの生活を思い返して、真っ先に思い浮かぶのは毎日きいていたアザーンである。アザーンとはイスラム教の礼拝時間になったことを知らせる歌のような呼び声で、１日５回モスクについている拡声器から大音量で流れる。宗教や人間の信仰心について興味がある私にとって、イスラム教が毎日の生活に根強く結びついているトルコでの生活は本当に刺激的であった。ムスリムと同じ環境で過ごしたこの１年間で、イスラム教徒、特にトルコ人の真の宗教観を知ることができた。日本で売られている旅行雑誌やガイドブックには、トルコ人の９割がイスラム教徒であるという説明をよくみる。ところが実際には、この数字は手続き上のものに他ならず、本当に信仰している人は国民の６割５分にとどまることを実感した。実際に私の友人関係を振り返ると、無信仰の友人の方が多いくらいである。さらに、私にイスラム教のことをなんでも教えてくれたムスリムの友人は、いつも「誰も強制されることはない、私も誰かを感化して信仰してほしいなんて思わない」と語

たこと、決まった対応を共有していないため１日中たらいまわしにされ、挙句の果てには「そんなに慌てなくてもね」と呑気に笑われたことは、私の温厚な性格を一瞬で変えてしまうくらい衝撃的なものだった。この一件以来、自覚は全くないが私はおかしいと思ったら口に出して意見を言うようになったようである。日本に帰国してから他人に指摘され、初めて気づいた変化だった。これから社会に出て波にもまれ、何度こうした理不尽な経験をするのか分からない。だが、私にはトルコでの経験、成長という武器があると思うと、なんでもかかってこいと強い気持ちになれる。トルコ留学は私に、見えないけれど人間として大事な変化までもたらしていた。

何を思い出しても、最終的にたどり着くのはこの留学が実現したことへの感謝である。静岡県立大学とボアジチ大学の提携には歴史があり、その点で私費留学と大きく違うのは準備段階からたくさんの支援やサポートをしていただけることである。短期留学を経て長期留学に臨む人も多い中、私の場合はこのトルコ長期留学が留学初体験で何も知識がなかった。そのため、丁寧な留学前ミーティングや健康増進室の方による海外生活の心得レクチャー、そして後援会様からの助成金はとてもありがたく、安心して渡航できた理由の一つである。

トルコという日本と全く異なる地で過ごしたこの１年間は、今までの人生の中で特別色濃く私の中に刻まれている。中学生の時に思い描いていた留学生活とは、いい意味で全く違うものになった。長年学んできた英語で何か挑戦したいという夢は、国内トップの国立大学ボアジチの講義で秀（AA）をいくつもとったことで実現した。興味のあった信仰心や宗教観については、そもそも異国に住むだけでも日々感じるものがあったが、現地での実体験そして熱心に誇りをもってイスラム教を語ってくれた友人のおかげで学びが深まった。この１年、現地語を全く知らなかった私が異国での生活を思い切り謳歌できたのはほかでもない、愛情と親切心に満ちたトルコの人々のおかげである。携帯が使えない、道も知らない、もちろんトルコ語を知らなくても必ず誰かが助けてくれる。この国には困った人を無視したり見捨てる人はいない。トルコ最終日、重すぎるスーツケースを当たり前のように運んでくれたのはやはり、見ず知らずのトルコ人だった。最後の最後まで彼らの優しさに甘え、お礼の次に思わず口から出た言葉は「また必ず帰ってくる」だった。

ボアジチ大学

交換留学報告書

静岡県立大学国際関係学部

国際言語文化科三年英米コース

言語であった。だが、だからといって日本人の学生が他の留学生と比べて特別トルコ語出来たわけではなく、アルファベットに慣れているヨーロッパ出身の学生はリスニングや発音の把握力が速かったし、トルコ語にはアラビア語源のものも多くあるため、アラブ地域から来た留学生にとっては馴染みやすい言語であった。といったように、トルコ語の授業では実に多種多様な留学生と切磋琢磨しながらトルコ語を学ぶことが出来た。この授業では、様々な国から来た生徒がそれぞれの持つ背景を生かして、トルコ語を学んでおりとても新鮮であった。また実際に授業で学んだトルコ語を大学外で使いそれがトルコ人に伝わった時、それは大変嬉しく言語の勉強の楽しさを感じることが出来た。次に、社会科学入門の授業であるがこれは一年生向けの、広い講堂、大人数で行われるスケールの大きな授業であった。先生は前の講壇に立ち、社会科学の基礎的な内容を生徒とコミュニケーションを取りながら解説していく。時折基本的な概念と現在の情勢を比較したり、冗談を交えながら授業を進めていたのが印象的であった。英語の授業に慣れていなく政治の授業も初めての私にとって授業についていくことは簡単ではなかったが、丁寧に解説してくれたためなんとか単位を取得できた。また、これを機に日本語でしっかりと政治の概念や国際関係の基礎を学ぼうという志を持つようになった。最後に中東情勢の授業である。実はこの授業、履修登録こそしていなかったが先生の承諾を得てなんとか授業に参加をしていたものである。それは三年生の授業であり受講希望者も多いので一定の生徒のみ受講が可能であ

営のお店のようだった。私達がツアーに参加したいと伝えるとさっそく二人は準備を始めてくれた。少年は店の奥に行き、父と思われる店主はバギー車のある場所へと招いた。少年が戻ってくると手にはヘルメットとマスクを持っており、私達に渡した。その後バギー車の使い方を教えてもらい、いざ出発となったが恥ずかしながら私はバギー車の運転に苦戦してしまった。すると、すぐにその少年が駆け寄り手際よく教えてくれた。彼は片足で車体に乗り、右側のハンドルを起用に調整し、片言の英語でゆっくりアクセルを動かすよう教えてくれた。少年のアドバイスもあり、無事にツアーを終えられたが、彼のあの時の対応に私はもの凄く感動してしまった。というのも、彼は率先して稼業のお手伝いをしているようで、父と思われる店主は少年に何かをするように頼んだ素振りはなく、少年は素早く自分の役割をこなしていた。その手際の良さには普段から手伝いをしてることが感じられたし、父に何も文句を言わず責任をもって私達に接客をしてくれた姿は大変立派であった。私があの少年だったら、あのようにお手伝いは出来ないだろう。さらには親に反抗すらしていたと思う。また、その出来事と同時に私はトルコの暗い側面も感じてしまった。トルコはヨーロッパとアジアの中央に位置し、西に行けば行くほどヨーロッパに近く東にいけばイスラーム世界が広がると言われている。西側は発展しているし、インフラも進んでいるが、反対に東側は経済的に貧困層が多いのが現実である。カッパドキアはトルコの中央に位置するが、どちらかというと東側で貧困に苦しむ人々も多い。カッパドキアなどの観光

最後に、この半年間は今までの大学生活の中で最も刺激的で実りのあった時間であった。様々な状況に直面し時に苦労したこともあったが、自分の周りにはいつも温かい人々がいて自分を支えてくれた。それは、大学を含め、先生、家族、友達など数えきれない程多くの存在があり、そのおかげで無事に私の留学生活は幕を閉じることが出来た。私を応援してくれた方々、このような機会を与えてくれた皆様、心から感謝を申し上げたい。特に、私をトルコに導いて頂いた静岡県立大学の先生や事務員の方には最大の感謝を示したい。後援会の皆様からのはばたき基金や佐藤先生や学生室の方の協力により頂くことができたメブラナ奨学金は、金銭的余裕がない私にとって大きな支えとなった。経済面に関しても支援して頂き感謝申し上げます。私は皆様への感謝の気持ちとともにこの経験を心に刻みこれからの将来を歩んでいきたい。

ったためである。内容も難しく、予習も毎週英語の論文を 20〜80 ページ程課されたため私にとっては大きな挑戦であった。今振り返ると私はその授業を受講出来て良かったと思う。大学で学ぶということがどういうことなのか、改めて感じることが出来たからである。先生の要求することも高かったのだが、なによりそれに答えようとするトルコ人学生の熱意を感じられた授業だった。特に安全保障に関して、トルコ人の学生は強い関心を持っており活発な議論がされていた。いかに、日本が安全であるのか或いは、実はそうではなく平和ボケしているだけで本当は安全保障についてもっと関心を持つべきではないのかとすら考えさせられた。残念ながらこの授業内容を完全に理解することはできなかったが、学問を真剣に学ぶことの大切さと日本という国を新たな視点でみることが出来た。このように、ボアジチ大学で授業を受講することは学問を学ぶことはもちろんそれ以外にも自分に多くを齎してくれた。

　次に、課外の活動として旅行先での出来事であるが、これは私が留学生とともにカッパドキアに団体旅行をした時の出来事である。カッパドキアというと気球や広大な大地とそこにランダムに広がる凹凸の地層をイメージすると思うが、今回は四輪バギーツアーでの出来事を述べたい。カッパドキアはご存知の通りは世界的に有名な観光地でそこには観光客向けの小売店や施設がたくさんある。私は友達の提案で、四輪バギーに乗りカッパドキアの大地を走るというツアーに参加したのだが、バギーを借りにお店に入ると一人の中年男性の店主と 7 歳ぐらいの少年がいた。どうやら、家族経

私は２０１７年の９月から、約半年間ボアジチ大学に留学をした。一学期のみというとても短い期間であったが、多くの方の支えがあり充実した時間を過ごせた。トルコでの生活は大変濃いもので、語りつくせない程多くの経験ができたが、ここでは学生生活として大学の授業と、課外活動として旅行先での出来事の二点について報告させていただきたい。

まず、学生生活として大学の授業について書いてゆく。私はトルコでは最高峰と言われているボアジチ大学に通った。ボアジチ大学は設立当時はアメリカの大学であり、現在もその教育方針が受け継がれていて、授業は全て英語で行われていた。私が受講した授業は四つある。そのうちの二つは、留学生用のトルコ語初級の授業、その他は社会科学の入門授業と中東情勢の授業であった。トルコ語初級の授業は、発音から初歩的な文法、日常会話まで幅広い内容を勉強した。トルコ語を勉強したことのない私にとってトルコ語とは未知の世界であったが案外日本語との共通点があるものだと感じた。それはトルコ語の文は日本語と同様ＳＯＶ語順で構成されているからである。ＳＯＶ語順とは主語、目的語、動詞の順で単語が並んでいるもので、反対に英語は主語、動詞、目的語で並べるためＳＶＯ語順である。ちなみに、トルコ語と日本語のルーツをたどればウラル・アルタイ語族という同じ語族に属しており似ている言語であるそうだ。ともかく、私達日本人にとってそういう意味でトルコ語は学びやすい

資源がある地域では、その豊富な観光資源を頼り生活をやりくりする人々がほとんどである。近年、ＩＳのテロがトルコで起こったことで観光客も大幅に減っておりトルコの観光ビジネスは痛手を負っている。それらの背景がある中でこれはあくまで私の予想だが、彼らのお店の小ささ、着ていた服装からして、店主と少年は決して裕福とは思えなかったし生活に余裕があるようには見えなかった。それを考えると私はとても複雑な気持ちになった。最初はなんて少年は偉いのだろうかと楽観的に思っていたが、その反面稼業に追われていないのか、しっかりと学校に行けているのか心配になった。その日が平日か休日かは覚えていないが、もし彼が学校に行けず十分な教育を得られないのならば、せっかく今一生懸命お手伝いをしているのに、彼の将来はどうなってしまうのかと不安になった。このように、トルコでは親の仕事を子供がお手伝いする家も多いようでそれは貧困ゆえに起こることである。働かないと生活が出来ないため学校に行きたくても行けないというケースである。また、イスタンブールなどの中心部では難民の子供も多く、昼間から街中で物乞いをする子供達もたくさんいる。彼らは将来、どのような大人になるのだろうか。トルコは近年著しく経済成長をとげ、中東の中では比較的安定した国であるが、全ての子供が平等に教育を受けられる社会を作っていって欲しいと強く願った。反面、小学生から教育を受けられる自分のありがたさも痛い程感じ、大学にいって勉強をしない大学生がいる日本は非常に残念な国だなと思わされた。